



石岡みさき(著)

『ジェネラリストのための 眼科診療ハンドブック』

〔評者〕 八戸市立市民病院救命救急センター・臨床研修センター所長 今 明秀

つや消しの白い表紙に空色のタイトル。なんと清潔なんだろう。書き手によって本の顔は変わる。上品な色使いに、多くの医療者は平積みになった新刊の群れからきっとこの本を手に取りたくなるだろう。そしてページをめくると、優しい文体に気づく。「〇〇してください」と。

それでは内容を紹介しよう。

▶瞬間接着剤を点眼してしまったらどうするか？

その答えは、「睫毛を切る」。読んで笑ってしまった。まるで、4コマ漫画に出てきそうな場面である(p.21)。

▶霰粒腫を結膜から切開した後に出血が止まらなくなったときはどうするか？よく考えればわかるかもしれないが、縫合止血ではない。答えは、「ガーゼを持った掌で切開した部分を圧迫し、ロダンの『考える人』のように大腿に肘をついてもらい、頭の重みで数分間圧迫すること」(p.23)。

▶日中に溶接、スキー、スノボを行い激痛で夜中に受診する電気性眼炎では、診察時にベノキシール®点眼麻酔薬を使う。これは20分ほどで切れるので、前もって説明しないと再受診になる。頻回のベノキシール®点眼は角膜障害を起こすので、処方してはいけない薬だそう。もし、患者がベノキシール®点眼常習者なら、それは自傷 Münchhausen 症候群だと(p.35)。

▶義眼というのは、ゲゲゲの鬼太郎のお父さん(目玉おやじ)のように球形だと私は思っていた。それは間違いで、カーブした円盤状の物(p.77)。

▶関東の花粉症(アレルギー結膜炎)はバレンタインデーから花粉が飛び始めるので、その2週間前の1月末から治療を開始する(p.80)。女性がチョコの心

配を始めたなら、点眼薬もスタート。花粉症では洗眼も効果的。水道水では塩素が眼の表面に傷を作るので、人工涙液が望ましい。人工涙液とは生食水のこと。人工涙液の使用上の注意に、「緑内障の診断を受けた人は医師に相談下さい」とあるが、その必要はないと明快。

▶温めるか冷やすかのよくある質問。ドライアイは温める。アレルギーでは冷やす(p.83)。そうなんだ！

▶点眼薬に小児用量はない。小児用点眼薬として売られているのは、「しめない」だけで薬効は同じ。成人用市販の「しみる」点眼薬には、あえてメントールを入れた(p.122)。子どもはワサビを嫌いだ。大人は好き。これと同じだ。

これだけ読んでも相当役立つ内容のはず。もしかしてすでにラインマーカーで印を付けていますか？

著者紹介を読んでも。石岡みさき先生の座右の銘は、「反省しても後悔はしない」だそう。

最近、中高校生を対象に、心に響いた言葉のコンテストが行われた。松岡修造さんのことばが有名人の中では断トツの1位の引用だった。なかでも「反省はしろ！後悔はするな！」が支持されていた。石岡みさき先生に尋ねてみた。「松岡さんの影響ですか？」「いいえ、独自に思うようになりました」。

松岡さんと同じことを言っている石岡みさき先生だが、松岡さんとは違う空気を感じる。それをこの本を読んで感じてほしい。3,400円也(税抜)。

● A5 / 頁198 / 2015年 / 定価：本体3,400円＋税
[ISBN978-4-260-02418-1] 医学書院刊